

## 日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会

### 2020年度の基本方針

日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会理事長 長谷川 幹



新型コロナウイルスが世界に猛威を振るっていますが、皆様におかれましてはその対策に奮闘されていることと思います。長期的な展望に立ち、3月20日の理事会で、2020年6月に開催予定の三重県津市での全国大会は1年延期にしました。また、理事会、委員会での会議にweb会議を取り入れています。

さて、当学会は2009年に任意団体として発足してから10年、2015年に一般社団法人になってから4年半になり、「同じテーブルで議論し実践する」、「学術研究をする」、「社会に広める」ことを基本理念として活動しています。

事業に関しては、2018～2020年度までの3年間日本損害保険協会からの助成を受け、7つの委員会が活発に活動しています。

主体性委員会は、基礎情報と主体性質問紙の内容がまとまり、昨夏に49名のデータを回復期と在宅期に分け収集しました。現在の出来事、将来の計画のそれぞれについて自我関与度、時間性、空間性、人間関係性を評価します。2020年度には全国調査のための協力をお願いしデータ収集する予定です。また、主体性が再構築される過程のモデル化とその過程を促進するためのリハビリテーション実践のあり方も検討していく予定です。

当事者社会参加推進委員会は障害のある人・家族の気持ちや歩みを発表する研修会「脳障害になったときにあるといい知識」を継続し、また、中途障害者が障害者モデルになり理学・作業療法の学校教育に協力する事業を継続しています。

研修委員会は、コーチング研修会を通じて、支援する側が当事者の主体性を引き出し、ともに歩むスタンスになるには、などを検討して専門職などのスキルアップを図ります。

文化芸術・スポーツ委員会は、西伊豆の水泳とポッチャ大会を支援しています。旅リハのメンバーとサーフィン、旭川のツアーセンターと連携して札幌でチェアスキーも計画しています。

機能評価委員会は、ICFをもとにしたヘルパーにもわかりやすい事例検討シートを活用し、現状の課題に対してどのようにかわることが有効か、を明らかにしていくことを目的として多職種の事例検討をしています。

ツール委員会は、全国に委員がいるのでweb会議を多用し、『主体的な生活』とは何のアウトカムで分けるべきか、の研究の枠組みを作り、具体的な調査研究を実施する予定です。

広報委員会は、各地域での情報があれば取り上げる、全国大会、各委員会や研修会の開催情報の更新、けあ・こみニュースの発行などを行っています。

そして、理事会に参画しているNPO法人日本脳卒中者友の会、NPO法人日本失語症協議会、NPO法人日本高次脳機能障害友の会、一般社団法人障害者の差別の禁止・解消を推進する全国ネットワークなどとの協働がこれまで以上に緊密な形で行動を起こしていく必要があります。

最後に、公益法人化をめざし正・賛助会員の増員に向けて皆様のご協力、ご支援をよろしくお願いいたします。

## 『第10回・三重大会』延期のお知らせ

大会長 古謝 由美 (NPO法人日本高次脳機能障害友の会理事長)

第10回日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会三重大会にご協力をいただいた皆様、参加予定の皆様、2020年6月12日、13日に三重県で開催を予定していましたが全国大会は新型コロナウイルス感染の拡大による健康被害の危険性が高いことにより開催を延期（2021年6月頃）とさせていただきます。

全世界を揺るがすコロナウイルスによる感染拡大により、大切な家族の健康や日常におけるライフスタイルが大きな影響を受けています。

大会に向け実行委員会を立ち上げ準備を進めてきましたが、現在、委員が集合することさえできなくなってきました。

感染者の数が日を追うごとに増え、各地で自粛を求める声が挙がっています。

私たちが今できることは、自分を守ること、すなわち家族を守ることです。手洗い、うがいなど感染予防対策を一人一人が自覚を持って取り組まれることが大切です。

「2021年第10回日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会三重大会」を笑顔で皆様とお目にかかれることを楽しみにしております。



# 学会関連団体トピックス

## NPO 法人日本高次脳機能障害友の会

NPO 法人日本高次脳機能障害友の会 理事 河田 幹子

NPO 法人日本高次脳機能障害友の会は、当事者・家族はもちろん支援者の方々も一堂に会して毎年、全国大会を開催しています。第19回は四国香川県に於いて「それぞれが自分らしく心豊かに生活し合える社会を目指して」をテーマにした開催でした。

10月18日（金）夜、高松国際ホテルにて265名が参加しての交流会には、ご当地のマスコットキャラクターの参加もあり、久々の再会を喜び合い話が弾む楽しいひと時となり、翌19日（土）はレクザムホール（香川県県民ホール）に会場を移し大会を開催。恒例となった当事者活動奨励賞授与式では、音楽を通して広く社会に理解してもらおうと活動しているグループ、幼少期の事故から困難に直面しながらも5年目の職場でステップアップを目指している方、出会いを大切に写真撮影の楽しみを見いだし、人生を謳歌されている方が表彰されその姿には感動しました。

その後は文部科学省等のガイダンス講演、「高次脳機能障害の画像診断について」香川大学医学部附属病院 脳神経外科 畠山 哲宗氏、「脳外傷後高次脳機能障害『臨床の現場からみえたこと』」かがわ総合リハビリテーション病院 副院長 河合 信行氏、「これからの高次脳機能障害児・者をささえる し・く・み」名古屋市総合リハビリテーションセンター 自立支援局長 鈴木 智敦氏からの講演など、現場での問題提起や支援の今後について聴くことができ、大変有意義な一日でした。450名の参加があり、地域の支援者の方々と地元の大学生や専門学校生も多数参加され、熱心に聴講していただけたことも嬉しく思いました。

当会は各種の相談に応じるほか、相互の親睦 交流 情報の発信、行政への交渉などに取り組み、より良い支援が実施されるよう、今後も粘り強くネットワークをさらに強化して活動していきます。

【ホームページ】<https://npo-biaj.sakura.ne.jp/top/>

## NPO 法人日本失語症協議会

事務局長・副理事長 園田 尚美

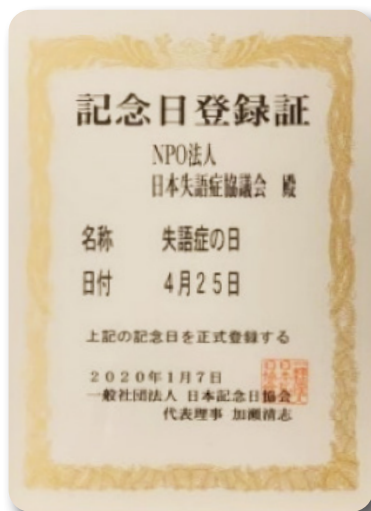
日本失語症協議会は、1983年創設、今年で37年になります。37年間を振り返ると、一番大きく、会員の方々の心のよりどころとしている事業は、毎年開催している全国大会と思います。第1回大会は東京、1999年にNPO法人格を取得後も、全国各地で開催し、「今日も元気か、笑顔はあるか」という故郷藤尚志先生のお言葉を参加者全員が共有し、言語聴覚士、ボランティア、家族、そして、主役である失語症の方々の、再会の場、様々な友の会活動の集大成としての全国大会となっています。2018年大分県大会では、全国大会を失語症協議会、NPO法人失語症デイ振興会、NPO法人ゆずりはコミュニケーションズ、開催県の言語聴覚士会が共催、日本中の失語症関連団体が一つとなって開催しました。2020年第34回全国大会は山梨県甲府市で、9月12日に開催予定です。

2018年に成立した、脳卒中循環器病対策基本法、附則第3条には、失語症の文言を明記したうえで、失語症のリハビリ環境の提供、整備を行い、失語症の方への当たり前の生活を保障すると記されています。昨今は、全国の失語症友の会の意義を、失語症の方とご家族が社会で生活するうえで、基本的な権利を確保し、当たり前に生きるという事を第一目標に掲げ、全国大会終了後、会員の意見として失語症のある方の権利を行使できるように、①失語症の身体障害者手帳の等級は正 ②失語症者の障害者年金等級は正 ③地域の失語症のリハビリテーション環境の整備・充実 ④介護保険認定・障害区分において、失語症調査項目の加筆 ⑤意思疎通支援者・要点筆記者の養成派遣の5項目を柱に厚労省への主な陳情事項として意見交換をしています。

今年、失語症の日「4月25日」が日本記念日協会で認定されました。三鷹高次脳機能障害研究所、NPO法人・リジョブ大阪、NPO法人日本失語症協議会の三者で、認定申請を行い、認定後は、失語症の日開催委員会として、日本言語聴覚士協会、大阪府士会に参加いただき、イベント開催の準備を進めています。イベントでは、全国の方々が参加できるようにSNSでも発信し、半永久的に開催する失語症の事業として考えています。

37年前、失語の方の居場所づくりから始まった失語症友の会ですが、昨今は多くの失語症の社会問題に関して、国に陳情を重ねる団体の役目をも担っています。友の会団体数も減少していますが、今後も目標を定め、講演会、講習会、調査研究事業等様々な活動が継続できるよう努力をまいります。

【ホームページ】<http://japc.info>





# 各地の活動

## ポラリスとかちの取り組み 2020

NPO 法人みんなのポラリス代表理事 水口 迅

私は2012年、46歳の時に脳梗塞に罹患、2017年に帯広で開催された第7回ケアコミ学会全国大会の運営に深く関わったことを契機に、身体障害者の相互支援を活動の柱とした「NPO 法人みんなのポラリス」を立ち上げました。以後、引きこもりがちな障害者が外へ出るように、社会参加のきっかけになるように、様々なイベントを行なってきました。

当法人理事に千葉絵里菜という重度脳性麻痺の当事者がいます。ケアコミ帯広大会の時に総合司会をしたので、覚えている方もいるかもしれません。

彼女は2017年、東京パラリンピックに向けてNHKが募集したリポーターのオーディションに合格して、今は東京でポッチャを中心に様々なパラスポーツ、障害者を取り巻く環境などについて精力的に取材活動を行っています。彼女のテレビでのリポートを見るうちに、スポーツも障害者にとって有効な「きっかけ」となることに遅ればせながら気づきました。同時期に脳性麻痺の小学生と知り合いました。ポッチャが大好きな彼は地域の社会福祉協議会で道具を借りて、1人でポッチャの練習を自宅でしているということでした。

それなら、彼のためにチームを創ろう。

そして2018年、十勝では初となるポッチャのクラブチーム「ポラリスとかち」を立ち上げました。チーム発足時のメンバー構成は、身体障害者が10名（うち中学生以下は5名）、保護者、コメディカル、福祉職などのサポートスタッフは20名ほどでした。

2019年には、所属する筋ジストロフィーの選手が北海道選手権で優勝しました。この大会に帯同して感じたのは、真剣勝負の醍醐味です。障害を持つ子供達にも真剣勝負の緊張感を味わってほしい。

2020年9月、ポラリスが主体となって、帯広で公式ルールによるポッチャのジュニア大会「U15ポッチャ帯広カップ」を開催します。北海道初となる公式ルールのジュニア大会。詳しくはFacebookページ「ポラリスとかち」か [ul5obihiro@gmail.com](mailto:ul5obihiro@gmail.com) まで。

現在、協賛金を絶賛お願い中です！



## 「出雲 縁ingトークの会」

出雲 縁ingトークの会 代表 祝部 英明

「出雲 縁ingトークの会」は、2016年に立ち上げ、島根県出雲市を活動拠点として高次脳機能障がい者とその家族の交流を図り毎月一回の定例会を通して社会的自立の推進及び社会復帰を目指し地域社会の高次脳機能障がいに対する正しい理解とリハビリテーションの普及を図ることを活動内容としています。私たちは当事者として、その症状の細かい部分を情報交換しながら研修等企画し、できるだけ多くの人に理解してもらいお互いが助け合えるような地域共生を進めていきたいと思い活動しています。

昨年より出雲市社会福祉協議会の協力のもと、高次脳機能障がいに関する啓発事業を始めました。2020年2月4日「障害と生活に向きあうために」というテーマで研修会を開催、理学療法士の石飛拓朗氏から「脳卒中と身体のリハビリについて」、言語聴覚士の景山洋一郎氏から「失語症を知ろう」と題した講演に加えて、当事者や家族等暮らしにかかわる人たちにも声をかけ、当事者になってからの工夫や本来専門職は当事者とともにある支援を行うという内容で参加していただきました。

「出雲 縁ingトークの会」は現在50代が活動の中心となっていますが、将来的に円滑な世代交代ができるように仲間を積極的に増やしています。

当事者に必要なのは社会参加の「きっかけ」だと思います。さまざまなイベントを企画するのは、当事者にとっての「きっかけ」になってくれれば、という思いからです。

私たちが行うことには障がい者と健常者といったバリアは一切ありません。今後もさまざまな活動を通じて、コミュニティを広げていけたらと考えています。

今回は、障がいの有無に関わらず、たくさんの方が交流できたことで、自分たちもいろんなことが出来るなどと感じた次第でした。



高次脳機能障がいに関する啓発事業

新しい夢をみて  
ゆっくりと一歩ずつ  
一緒に...

障がいと生活に  
向きあうために

言語聴覚士 景山 洋一郎 氏  
「失語症を知ろう」

理学療法士 石飛 拓朗 氏  
「脳卒中と身体のリハビリについて」

高次脳機能障がい啓発事業  
「高次脳機能障がい」は人によって現れ方が様々であり、それによってどのような障がいがあるかを断りにくいです。  
私たちは、当事者として、その障がいの細かい部分を情報交換し研修等企画し、できるだけ多くの人に理解してもらい、お互いが助け合えるような地域共生を進めていきたいと思っています。

※1 この事業は、「出雲市社会福祉協議会の会費、寄付金および共同募金」を財源とした  
出雲市社会福祉協議会からの福祉団体の活動助成金を受けて実施しております。

※2 令和2年2月4日(火)  
開場10:00/研修会10:30~12:00

※3 新着法人エスポーザール  
出雲クリニック 3F 多目的室  
島根県出雲市小瀬2-1

【主 催】 出雲 縁ingトークの会  
【後 援】 出雲市社会福祉協議会、医療法人エスポーザール出雲クリニック

参加費 無料  
申込金 不要



# 失語症デイサービス「言葉のかけ橋」

## 失語症のある人の地域支援

言葉のかけ橋 佐藤 誠一（言語聴覚士）

私は2006年より盛岡市で失語症のある人のためのデイサービス「言葉のかけ橋」を運営しています。これまで言葉のかけ橋を拠点にフォーマル、インフォーマルな活動を通して失語症のある人たちの地域支援に取り組んできました。

デイサービス言葉のかけ橋は、現在70名弱（一日定員18名）の利用者が通所しています。中心的な活動はスタッフが会話パートナーとしてサポートしながら進めるグループワークです。グループワークでは特に言葉の障害が重い人が称賛されることが多く、「はい」や「おはよう」の一言が言えただけで周囲から大きな拍手が送られます。

一般に言葉に不自由がある人は馴染みのない人たちと交流することに気後れしがちですが、同じように言葉に不自由のある仲間や、サポートのあるインタラクティブな会話環境がコミュニケーション面や心理社会的面でよい影響をもたらすようです。

インフォーマルな活動では「失語症カフェ」や「旅行」などを行っています。失語症カフェでは、失語症当事者・家族の交流会や、失語症啓発のためのセミナーなどを行っています。また旅行では東北各地の失語症のグループを訪ねたり、全国レベルの失語症者のつどいの開催地に出かけたりしています。これまでに北海道から沖縄まで地域を越えて交流を深めてきました。

海外に目を向けると、北米でも失語症会話パートナーの養成や、当事者の参加を重視した失語症センターが相次いで開設されるなど、失語症への介入に医学モデルから社会モデルへのパラダイムシフトが起こっているようです。

現在、失語症デイサービスは全国に30か所程度開設されていますが、今後さらに各地に増えて、失語症のある人の地域支援の拠点となることを期待したいと思います。



2019年11月9日 失語症友の会交流会 in 仙台（青葉城にて）

## 脳卒中フェスティバル

代表 小林 純也（理学療法士）

こんにちは。脳卒中患者だった理学療法士の小林純也です。

私は、「楽しい！」をベースに脳卒中経験者と健常者の心の溝を無くし、全ての人の可能性は無限大であることを伝えるイベント「脳卒中フェスティバル」を主催しております。2017年に上野で始まったこのイベントは、脳卒中当事者と健常者が協力して音楽ライブ、ファッションショー、スポーツ、料理などの多彩なコンテンツを創っています。



おかげさまで、毎年規模を拡大し、2018年には六本木ヒルズで開催し（430名動員）、NHKや朝日新聞といったメディアでも多数取り上げられている、注目のイベントなんです！

今年は東京と名古屋でそれぞれマルイとららぽーととコラボして開催させていただきます。時期については8月以降を予定しており、下記のQRコードからご覧いただける公式サイトで発表しますので、実際に足を運んでいただくと嬉しいです！



**編集部注記：**名古屋に関しては2020年5月の開催を予定しておりましたが、コロナウイルス拡散予防対策として、延期となりました。現在、秋頃で日程を再調整中とのことです。

## 編集後記

新型コロナウイルス感染拡大により私たちの生活は、外出など当たり前に思っていたことが制約される生活リズムの変化などわずかな不便さも心身に影響することを実感しています。この状況を1人1人が理解し、1日も早く終息することを願うばかりです。今年1月に発行された「失語症者のための群読の詩集」の中に「話したい」という詩で、「夫の 苦勞を 私の夢を たまってる すべてを 思いっきり 話したい」とありました。当たり前のように言葉を介して生活ができる大切さを考える深い詩でした。

- 中島 鈴美 -